

[学会] 第1353回 千葉医学会例会  
第34回 千葉精神科集談会

日時：平成29年1月28日（土） 9:50 ~ 17:40

場所：京成ホテルミラマーレ

1. 注意欠如多動症児への家族機能評価を含めた包括的アプローチ：千葉大学医学部附属病院における入院症例から

大迫鑑顕，鈴木耕輔，稲積和彦  
細田 豊，小松英樹，佐々木 剛  
伊豫雅臣 (千大)

ADHDは二次障害として反抗挑戦性障害や行為障害を合併することが知られている。その背景には心理社会的因子が影響していることが多いが、外来診療のみでは状態像や生活環境を把握することは困難である。今回、外来にて薬物療法が奏功せず、入院による症状と家庭環境の評価が有効であったADHDの症例を経験した。訪問看護、児童相談所、Child Protect Teamとの連携など、当科の活動と合わせて報告する。

2. 老年期統合失調症患者の呻吟のコントロールに苦慮した1例

吉川晃司，増茂悠人，丸山悟史  
小川 道，山内厚史，木村敦史  
長谷川 直，石川雅智，伊豫雅臣  
(千大)

呻吟の原因特定に苦慮したが、常同的な呻吟/身体所見/頭部MRIの結果は前頭葉の機能低下を示唆しており、薬剤の減量/中止に伴い症状が改善したことから、薬剤性か前頭側頭型認知症が原因と考えられた。過量の薬物は要注意と考えさせられた。

3. 小児科との連携が有用であった思春期児童の摂食障害の1例

石井宏樹，鈴木陽大，桶谷 優  
宮澤惇宏，鎌田 雄，新津富央  
伊豫雅臣 (千大)  
山崎史暁 (千葉市立青葉)  
塩浜 直 (千大・小児科)

症例は12歳女性。神経性食欲不振症の治療で当院小児科に入院し、当科はリエゾン介入を行った。身体科との連携において、症候学的な精神状態の評価と同時にバイオマーカーを用いた身体評価を並行して行うことで、身体科から精神科への円滑な入院治療の移行が出来た。

4. 精神遅滞を背景とした解離性障害との鑑別を要した思春期発症の統合失調症の1例

増茂悠人，丸山悟史，吉川晃司  
小川 道，山内厚史，木村敦史  
長谷川 直，伊豫雅臣 (千大)

身体症状症は頻度の高い疾患であり、気分障害が高率に合併する。近年、双極スペクトラム障害の概念により双極性障害の概念が拡大し、特に不安と抑うつ併存例では双極スペクトラム障害が隠れている可能性に留意すべきとの報告がなされている。我々は、激しい症状を呈する身体症状症に双極スペクトラム障害を認め、双極性障害に準じた薬物療法により有効な精神療法を行うことができ、改善に導くことのできた症例を経験した。

### 5. クロザピン自己中断後の症状悪化に対してより少量のクロザピンが奏功した1例

丸山悟史, 増茂悠人, 吉川晃司  
小川 道, 山内厚史, 木村敦史  
長谷川 直, 伊豫雅臣 (千大)

本症例では初回のクロザピン及び修正型電気けいれん療法 (mECT) でドーパミン過感受性精神病が改善した可能性や, mECTがクロザピンの有効な増強療法として用量減量に寄与し, 副作用の減弱, 内服遵守に有効である可能性が考えられた。

### 6. 頭蓋骨欠損のある統合失調症患者に対して, 電気けいれん療法を行った1例について

鈴木陽大, 石井宏樹, 桶谷 優  
宮澤惇宏, 鎌田 雄, 新津富央  
伊豫雅臣 (千大)  
橋本 佐 (千大院)

50歳女性, 薬物治療に難渋していた頭部外傷の既往がある統合失調症患者。危険性について調べた上で電気けいれん療法を行い, 改善が得られた。頭部外傷の既往がある患者でも, 電気けいれん療法を治療の選択肢の一つとして考えるべきである。

### 7. 複数の医療機関を経て, 緊張病候群と診断された1例

鈴木耕輔, 大迫鑑顕, 稲積和彦  
細田 豊, 小松英樹, 伊豫雅臣  
(千大)

不明熱と意識障害を主訴とする高齢女性が複数の内科医療機関で精査されたが長期にわたり原因不明であった。精神科医がリエゾン介入し, 緊張病の診断にてmECTにより改善を得た。緊張病の疾患概念は内科医には一般的でなく, 迅速な診断と治療は患者の生命や機能予後に大きく影響することを理解しておく必要がある。

### 8. 急性躁病エピソードに対してアリピプラゾール単剤療法と頻回の外来フォローにより早期退院および寛解維持が実現した1例

桶谷 優, 石井宏樹, 鈴木陽大  
宮澤惇宏, 鎌田 雄, 新津富央  
伊豫雅臣 (千大)  
橋本 佐 (千大院)

医療者に対する暴言・暴力といった激しい行動化を伴う急性躁病エピソードに対して短期間での退院を実現した症例を経験した。

鎮静をかけずに早期の抗躁効果が期待できる薬剤を第一に選択する事で入院期間を短縮し, 退院後の頻回の外来診察を介した症状観察, 重点的な疾患教育, 服薬指導を行うことが, 寛解維持に寄与する可能性がある。

### 9. 自閉スペクトラム症児に対するチペピジンヒベンズ酸塩の治療効果に関するオープン試験

岡東歩美, 伊豫雅臣 (千大院)  
佐々木 剛 (千大)  
橋本謙二

(千大・社会精神保健教育研究センター)

近年中枢性鎮咳薬として薬価収載されているチペピジンヒベンズ酸塩が脳ニューロンにおけるGタンパク質共役型内向き整流性K<sup>+</sup>チャンネル活性化電流を抑制することが明らかにされた。我々は既に注意欠如多動症児への投与で効果を報告している。自閉スペクトラム症児10名を対象にチペピジンヒベンズ酸塩を4週間投与し, 臨床症状の変化を評価するオープン試験を予定している。

### 10. ゲノム多様性による生体脳プロファイリング

大石賢吾, 金原信久, 仲田祐介  
小田靖典, 伊豫雅臣 (千大院)  
高瀬正幸 (ザッカーヒルサイド)  
佐藤泰憲

(千大院・未来医療グローバル治療学)

ドーパミン神経伝達に関係する一塩基多型 (SNP) が知られている。これらのSNPには, 関連遺伝子活性に影響を及ぼす機能性を有したSNPが存在する。中にはドーパミンの合成や分解, DRD2活性に比較的高い影響力を有し, 出現頻度の高いSNPも報告されている。これらのSNPを組み合わせて評価することによりDRD2を介したシグナルの潜在的な強度を推測することが可能と考えられる。

### 11. 双極性障害患者のライフイベントに関連した心理的苦痛に対する横断研究

佐藤愛子, 橋本 佐, 木村敦史  
新津富央, 伊豫雅臣 (千大院)

治療抵抗性うつ病患者は寛解うつ病患者に比べ、発症の契機となった出来事に対してPTSD患者と同様の症状 (Psychological Distress Symptoms: PDS) を来し易く, bipolarityの有るうつ病患者は、無い患者に比べPDSを来し易い。双極性障害患者は健常者や他の精神疾患患者に比べPTSDに罹患し易いとの報告もあり, 双極性障害患者におけるPDSの有無, 気分の状態による差異を検証する。

### 12. ドパミン過感受性を有する統合失調症患者におけるブロナンセリンとオランザピンの有効性に関するオープンラベル, 無作為化割付による検討

畑 達記, 新津富央, 石川雅智  
伊豫雅臣 (千大院)  
渡邊博幸

(千大・社会精神保健教育研究センター)

本試験は, ドパミン過感受性精神病 (DPS) に対する治療戦略を確立する目的で, ブロナンセリンとオランザピンとの無作為化割付によるオープンラベル比較を行う。現在, 協力医療機関と連携し, リクルートを進めている。

### 13. 治療抵抗性統合失調症患者に対する治療法別の有効性と予後に関する研究

仲田祐介, 大石賢吾, 伊豫雅臣  
(千大院)

金原信久

(千大・社会精神保健教育研究センター)

治療抵抗性統合失調症患者30名の後方視調査を行い, ドパミン過感受性精神病 (DSP) に有効性が示されている, 長半減期型抗精神病薬およびアリピプラゾールによる治療 (DSP治療) と, クロザピン (CLZ) の治療効果を比較検証した。その結果, DSPを体験した17名に対しては, DSP治療がCLZと同程度の治療効果を持つ可能性が示唆された。

### 14. ドパミン過感受性モデルラットにおけるグルタミン酸シグナル

小田靖典, 大石賢吾, 仲田祐介  
新津富央, 伊豫雅臣 (千大院)  
金原信久, 橋本謙二

(千大・社会精神保健教育研究センター)

グルタミン酸が統合失調症の病態に深く関与しているとされているが, ドパミン過感受性精神病におけるグルタミン酸シグナルについての報告はなされていない。今回モデルラット脳内のグルタミン酸シグナルを調査, 報告した。

### 15. 統合失調症から双極性障害へ診断を変更し, 治療法の変更により改善を見た2例

田村真樹, 大岩宜博, 野々村 司  
(千葉市立青葉)

山崎史暁, 高橋純平, 篠田直之  
(同・児童精神科)

双極性障害は発症時に正しい診断に至り難く, 時に精神病圏と誤診される。今回我々は長年統合失調症の診断を受けていた症例で双極性障害へ診断を見直し, 治療法の変更で改善した2例を経験したため, 若干の文献的考察を加え報告する。

### 16. 成人期の自閉症スペクトラム (ASD) の客観的評価の試み: WAIS-III中の対人的相互作用から

宮崎 尚, 田邊恭子, 内田亜由美  
伊豫雅臣 (千大)  
白石哲也 (こころの杜クリニック)

WAIS-IIIの測定値は診断基準に無関係であるが, WAIS-III中にASDの行動特性が見られる事も多い。しかしその客観的評価を行った報告はない。

そこでWAIS-III中におけるASD患者の行動特性の客観的評価を試み, それが可能であることが示唆された。

### 17. 言葉が意味をもつ秘密: マインドフルネスという精神療法がいたりついた弁証法

根本豊實 (磯ヶ谷病院)

言葉が意味をもつのは, 関係行為の事後的な構造的効果としてであり, その意味で弁証法的な統合に基盤を持つ。精神療法において言葉は重要な要素だが, 以上のような言葉が意味をもつ秘密を考えると, マインドフルネスは, 日常の言語的分節世界の自明性を突き

破り、弁証法的構造をもつ意味の流動性を暴露するその性質のゆえに、精神療法としての重要性は特筆すべきものであり、このことは治療者においては一層明確であろう。

#### 18. 当院におけるクロザピン使用実績

小池 香, 太田貴代光, 赤田弘一  
斎賀孝久, 佐藤茂樹 (成田赤十字)

当院は2016年12月末日までで治療抵抗性統合失調症30例にクロザピン (CZP) を使用した。17例が当院でのCZP治療を継続しており、10例はCZP治療を中止した。使用前後でクロロプロマジン換算量の平均値、BPRSの平均値共に有意に減少した。今後もサターンプロジェクトのコアホスピタルとして積極的にCZPを使用していきたい。

#### 19. 我が国における気分安定薬の処方実態：厚生労働省「第1回NDBオープンデータ」を分析する

吉村健佑 (厚生労働省)  
佐藤泰憲  
(千大院・未来医療グローバル治療学)  
橋本 佐, 伊豫雅臣 (同・精神医学)

厚生労働省は平成28年にレセプト情報等データベース (NDB) のデータの一部を集計し「第1回NDBオープンデータ」として公開した。これを用いて我が国の気分安定薬のうち、特に妊娠可能年齢の女性に対する処方実態について提示する。

#### 20. 当科のクリニカル・クラークシップにおける医学生アンケート調査

鎌田 雄, 新津富央, 木村敦史  
細田 豊, 小松英樹, 長谷川 直  
佐々木 剛, 石川雅智, 金原信久  
椎名明大, 中里道子, 伊豫雅臣  
(千大)

2016年2月～12月に当科で臨床実習を行った学生100名を対象にアンケート調査を行った。(有効回答率77%)

評価の平均は大学病院4.3/5点、関連病院4.1/5点であり、外来初診患者の予診とそのフィードバックなどが満足度を上げる要因と考えられた。

精神科を将来の進路に考える学生は実習の満足度が高かった。学生実習の満足度上昇は、将来の進路に精神科を考える学生の増加に寄与する可能性があると考えられた。

#### 21. 総合病院におけるアルコール依存症入院治療プログラム実施患者の入院形態別予後調査

倉田 勉, 橋本 佐, 多田素久  
吉野晃平, 石毛 稔, 菊池周一  
矢田洋三 (袖ヶ浦さつき台)

入院形態が治療効果に影響するかを明らかにするため、患者64名を対象に、一般科・任意・非自発的入院について、退院後の断酒率や通院継続率を調べた。入院形態間で有意差はなく、入院形態に限らず有効なプログラムを提供できる可能性があることを示した。

#### 22. 周産期メンタルヘルス臨床研究について

橋本 佐 (千大院)  
渡邊博幸  
(千大・社会精神保健教育研究センター・  
治療・社会復帰支援研究部門)

現在、日本周産期メンタルヘルス診療ガイド (仮称) 作成委員として気分障害の薬物療法を担当しているが、質の高いエビデンスが不足している。我々は、うつ病・双極性障害の女性における妊娠後の服薬・治療行動と臨床転帰や、精神疾患ハイリスク妊婦に関わる多職種連携と産後の母子の転帰に関する前向き追跡調査を、特に千葉県内で計画中である。

#### 23. White matter alternations associated with autistic traits in obsessive-compulsive disorder: 強迫症における自閉傾向と脳白質変化との関連

久能 勝, 清水栄司  
(千大院・認知行動生理学)  
平野好幸, 中川彰子, 浅野憲一  
大島郁葉, 永岡紗和子  
(千大・子どものこころの発達教育研究センター)  
松本浩史, 舛田喜正  
(同・放射線部)  
伊豫雅臣 (千大院)

強迫症の治療抵抗性の要因の一つに、自閉スペクトラム症の併存が指摘されている。本研究では、強迫症のDTI (diffusion tensor imaging) 研究で白質変化が指摘されている白質線維を対象に、FA, medial diffusivity (MD), axial diffusivity (AD), radial diffusivity (RD) 値と Autism Spectrum Quotient (AQ) 総得点との相関を調べた。その結果、左鈎状束のMD, RD値とAQとの間に有意な相関があった。鈎状束は社会的感情の障害に関与しており、自閉傾向が

高い強迫症患者の治療に社会的感情の障害を考慮する必要があると考えられた。

**24. 小児期・思春期のグルコラファニンの摂取による、妊娠期に免疫活性化した母マウスから生まれたマウスの成人期における認知機能障害の予防**

松浦暁子, 橋本謙二  
(千大・社会精神保健教育研究センター・  
病態解析部門)  
伊豫雅臣 (千大院)

妊娠期にPoly (I : C) を投与し免疫活性化した母マウスから生まれた仔マウスがグルコラファニンをすると成人期における行動異常, 免疫組織学的評価を改善した。

**25. 統合失調症における初回入院の退院時抗精神病薬用量と2年転帰の関係**

榎原雅代, 伊豫雅臣 (千大院)  
渡邊博幸  
(千大・社会精神保健教育センター)

千葉大学医学部附属病院精神神経科に初回入院した統合失調症圏患者のカルテを後方視的に調査した。初回退院時の退院時処方量で標準量と高用量群に分け退院2年後までの脱落までの期間に有意差は見られなかった。初回退院時の抗精神病薬量とその後の変化を見ると, 標準量群では2回目退院時の処方量も2年後外来での処方量も共に増加していたのに対し, 高用量群では2回目退院時処方量は変化無く, 2年後外来処方量は著明に減少していた。統合失調症初期治療に反応する群では後により多量の抗精神病薬が必要になる場合があり注意が必要である。

**26. ミュンヘン大学精神医学教室留学報告**

木村 大 (千大院)

2014年4月から2016年8月までドイツ連邦共和国のミュンヘンにあるミュンヘン大学 (Ludwig-Maximilians-Universität München) 精神医学教室に留学したため報告する。留学期間には統合失調症患者のエンデュランス運動後の脳の形態学的変化を調べるため脳画像研究を行い, さらに統合失調症モデルマウスの海馬領域における細胞数をStereologyを用いて定量化した。

**27. 千葉における新しい摂食障害支援に向けて: 認知機能改善療法・神経調節治療を中心に**

中里道子 (千大院)

本発表では, 摂食障害, 主に神経性やせ症に対して, 認知特性に焦点付けする認知機能改善療法, 及び, 神経調節治療の有効性について, 先行研究, 及びパイロット研究の知見を報告し, 新規の治療法への展望を探る。